

地小出版  
方小版

情報誌

# アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 143円)
	年間 1,500円(税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター  
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町20  
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

## 『目でみるブラジル日本移民の百年』を刊行して 日本「近代」の足跡を追いかける

文・石井 雅

### 風響社がなぜブラジル?

事務所兼自宅の廊下に山のように積み上げられた本がある。出来上がったばかりの『目でみるブラジル日本移民の百年』である。小出版ではごく普通に見られる光景だが、小社をよく知る方には少し疑問が浮かぶことであろう。風響社がなぜブラジルなのかと。

小社は1991年創業以来、アジア関係の人類学・歴史学の専門書を中心に年十数点ほど刊行している、典型的な零細出版社である。そんな社が、現地の総力をあげた記念碑的の事業である「ブラジル移民百年史」(全五巻・別巻一)の発行所となったきっかけはというと、ミクロネシアであり満洲であった。

昨年のものである。サンパウロの友人からメールがあった。彼はかつて小社で出した『日本統治下ミクロネシア文献目録』(山口洋児著、2000年)の編集を手伝ってくれた院生の一人だった。その後、折りに触れメールを交わす間柄となったが、数年前からブラジルにJICA派遣のボランティアとして赴き、文化事業の支援活動をしている。

その彼が、今度はサンパウロで移民百年史の仕事に携わっているというのだ。第一弾として別巻写真集を準備していること、それを第一回移民船神戸出航百周年を記念して今年4月28日に刊行すること、などを聞かされ、その後、編集や流通その他の出版界の事情について質問を受けることとなった。



そうこうしているうちに、発行元にと打診していた大手版元から具体的な返事がこないこともあり、もし小社でよければと名乗りを挙げてしまったのが、発端だったのである。

### 小社のDNAに埋め込まれたもの

満洲はというと、筆者の駆け出し時代に関わった地域である。1980年前後、まだ引揚げた方達の多くが健在で、残留孤児の存在が知られ始めた頃であった。勤め先の設定した主題「望郷」に従い、多くの本を作ったが、満洲各地を歩き、さまざまな引揚げ体験をかう中で、日本とアジアの関わりを生きた歴史として実感するようになった。

しかし、そうした歴史を追究する機会はその会社では持ちえないまま、立ち上げたのが今の会社だった。すな

わち小社のDNAに埋め込まれたものは、日本や日本が関わった地域の「近代」だったということになる。

ブラジルに渡り異文化の中で苦労を重ねた移民の人たちは、植民地統治の下でいやおうなく日本文化を受け入れざるを得なかった台湾や朝鮮などの人たちと立場こそ違え、日本という「近代」が生み出した多元文化的存在であることは確かであろう。

そうであれば、まぎれもなくこの仕事は小社の守備範囲だし、もし大手がしり込みしているとすれば余計に面白いとなる「へそ曲がり」は、伝統的な小出版のオヤジ文化そのものでもある。かくして、現地編集委員会との二人三脚での作業が始まることになった。

### 一般向け別巻写真集は、日本語とポルトガル語のバイリンガル版

原稿はほとんど完成していたものの、具体的な作業となると課題は多かった。期限までに一万部作らなければならぬが、ちょうど平日ほどの時差がある中での作業、しかもすでに年末を迎え残された時間は少ない。

日本語世代が高齢化してしまったブラジルと、出稼ぎ家庭の多くが言語の壁を抱えたままの日本。こうした両国の事情から、一般向けに企画された別巻の写真集は、日本語とポルトガル語のバイリンガル版とし、どのような言語環境の家庭でも読んでもらえることを使命としていた。しかし、小社にポルトガル語の知識はほとんどない。

写真は編集委員会で厳選されていたが、日系人としての意識やまとまりが薄れてきた近年のものは、体系的に収集されていない嫌いがあり、優れたデザイン性でカバーしなければならない。

しかし、そうした困難は容易にクリ

アされていた。小社は創業当初からDTPによる編集・組版を行っており、デザイナー事務所とソフトを共有することで編集や連携の効率を高めることができた。

現地との時差もかえってよかった。こちらが昼間作業した結果を夕方メールでブラジルに送ると、現地では朝だから我々が寝ている間にどんどん作業が進み、その結果が翌朝メールで届いている。つまり二交代フル操業となって日程をこなしていったのである。

バイリンガル組版も現在のソフト・フォント環境では何ら問題なく、多言語に慣れていないデザイナーでもそのまま組み込めた。

こうして、予想した困難は容易に乗

り越えられ、印刷所への入稿はぎりぎりとはなったものの、東京と神戸で行われた百周年記念の式典で無事に披露され、6月に行われる現地式典に向けて送った本は船積みされ、ちょうど太平洋を渡っている頃である。

さて、「作るは易く売るは難し」とは出版界の不滅の金言(?)である。冒頭に記したように廊下に積まれた本の山をどのように減らしていくかが、本当の勝負といえよう。

地球は狭くなった。ブラジルからのメールで知ったという電話注文が飛び込んでくる。いやブラジル日系人にはすでに地球は狭かったのかもしれない。刊行の資金援助をしてくれたある

日系企業の創業者は、ハルビン生まれだった。現地役員の一人もやはり満洲引揚げ者で、夢を求めて再びブラジルに移住されたという。

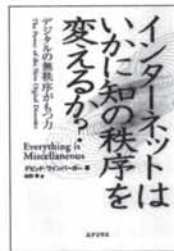
こうして生きた歴史を再び目の当たりにすることとなった。小社の主題は変わらないが、フィールドは広がった。百年史全五巻という難事業はこれからだし、確たる販売見込みもないまま、現地とともに希望を込めて作った一万部を、単に商品としてだけでなく、家族や人の絆を深める種として、また文化交流の糧として、無駄なく広げていく仕事が残っている。

多くの方とネットワークを広げつつ、もう一頑張りしたいと思っている。(いしい ただし/風響社代表)

## 新刊ダイジェスト

※価格は総額(税込)表示です。

### 『インターネットはいかに知の秩序を変えるか? -デジタルの無秩序がもつ力』 ●デビッド・ワインバーガー著

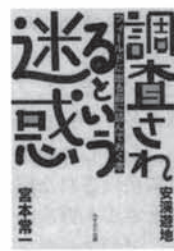


学問とは方法づけられた知識の体系であると、かのデカルトが述べたように、古来学問は分類し体系化することに求められ、その集積庫たる図書館は、知を組織化するために様々な分類法を考案してきた。だから、18世紀に百科事典編集に当たってアルファベット順記列が議論された時、「神の秩序を侵した」との非難が巻き起こったというところが今、表現媒体のデジタル化と流通装置と

してのインターネットは、知識を「破片」とし、「物理的制約から自由になった知識」は、「美德としての無秩序」社会を生み出した。では、その向かう先はどこなのか。本書終章の見出しは「雑」である。

◆2520円・四六判・344頁・エナジクス・東京・2008/3刊・ISBN978-4-9903345-3-6

### 『調査されるという迷惑 -フィールドに出る前に読んでおく本』 ●宮本常一著



人類学、民俗学を学ぶ者にとってフィールド・ワークは欠かすことができない。本書はその実践にあたって特に留意すべき点を考察したもの。民俗学者で、幅広いフィールドワーカーで知られる宮本常一氏の調査に関する生前の一文が収録されている。また安溪氏は西表島や熱帯アフリカでの豊富なフィールド・ワークの体験を綴って問題を提起している。

両者とも調査する側と、調査される側の立場からいくつかの事例を交えて取り上げており、どのように接すれば、また心掛ければ目的に合った効果的なフィールド・ワークを行うことができるかを学ぶことができる。副題のとおり今後フィールド・ワークを目指す者にぜひ一読を奨めたい。

◆1050円・A5判・118頁・みずのわ出版・兵庫・2008/4刊・ISBN978-4-944173-54-9

### 『近代日本の植民地博覧会』 ●山路勝彦著



1970年の大阪万博は「人類の進歩と調和」をテーマに掲げたが、いかなる時代、国家においても、博覧会が国威の発揚を目的にしていることは自明のことである。戦前にわが国が台湾、朝鮮、満州で開催した博覧会はその典型で、植民地権力をむき出しに、「日本近代の姿を植民地住民に植え付けることに主眼が置かれた」。そうした、日本人の植民地に向けた眼差しと、国家の意図に焦

点を当てたものであるが、その裏づけとして、絵葉書、錦絵、ポスター、チラシ、パンフレットなどの大衆向け宣伝媒体を用いている点がユニークである。台湾では京劇に住民が熱狂し、統治方針の思惑が外れたことも明らかにする。

◆3150円・四六判・314頁・風響社・東京・2008/1刊・ISBN978-4-89489-125-8